

## 私と政治行政学科（行政学科）の先生方との出会い —断片的思い出—

外 川 伸 一

私は、平成29（2017）年4月から令和2（2020）年3月までの3年間、政治行政学科長を拝命していた。しかし、学科長に就任してしばらくすると、「どうやら政治行政学科が廃止されるようだ」との「噂」を耳にするようになった。そしてそのことは、年度末の法学部教授会で事実上正式に表明されることになる。こうした事情もあり、私は他の歴代学科長とは異なり、今後、学科の教育・研究環境に大幅な改善を加え、所属する教員にそれぞれの研究分野でさらなる活躍をしていただくための将来展望を描くことは許されなくなった。したがって、私の学科長業務は、好むと好まざるとに関わらず、「定型業務」を超えるものは何一つなかったと言わざるを得ない。

こうしたこともあり、『法学論集』の編集委員から、歴代学科長の一人として当時の状況を振り返る一文を寄稿せよとの要請があった際には、こうした事情を述べ一度は強くお断りさせていただいた。しかし、なお執筆を懇願されたため、やむなく要請に応じることにした次第である。

しかし、要請に応じたとはいえ、先の事情により学科長としては「定型業務」をこなしていただけであり、関係諸氏に披瀝することは何一つない。それでは、何を記せば良いものかとしばらく思案した結果、私個人と政治行政学科の先生方との断片的思い出を記す以外にはないのではないかという結論に達した。したがって、これから記すことは、編集委員の意図とは

全く異なり学科長としての思い出などでは全くなく、私個人と政治行政学科の先生方との私的思い出に過ぎない。学科がなくなることを念頭に置けば、こうした駄文も許容されるのではないかと居直り、筆を執る次第である。まず、そのことをお詫びしておきたい。

私は、昭和57（1982）年4月から平成15（2003）年3月までの21年間、山梨県に行政職員として勤務した。私の将来の希望は、幼いときには医師であったが、その後幾多の（？）変遷を辿り、大した熟考を重ねたわけではないが、この直前には漠然と研究者になりたいと決めていた。大学院修士課程に入学し、博士課程への進学も事実上決まっていたが、故あって故郷に帰らざるを得なくなった。当然、新規学卒者でもない私を雇ってくれるところなどどこにもなく、そういう意味では公務の道しか残されていなかったというのが正直なところである。

私の最初の配属先は、土木部監理課契約建設業担当で公共工事の入札と契約の仕事に追われた。その後、昭和63（1988）年4月から通算7年間、企画部門でリゾート計画・総合計画の策定、知事と有識者の座談会である「幸住県懇話会」の企画、県職員の政策系大学院への派遣準備、山梨大学の先生方との協働による政策科学研究などの仕事に携わることになる。詳しい時期は忘却してしまったが、この間、県の行政資料収集の件で故江口清三郎先生（後の私の恩師である）と中井道夫先生のお二人が企画課を訪れてくださった。これに私に対応させていただいたことが行政学科の教員の方々との関係の始まりである。理由は未だに定かではないが、この頃、行政学科の設立記念パーティー（？）に招かれ、行政学の泰斗で初代行政学科長の故河中二講先生に激励のお言葉をいただいたことは鮮明な記憶として残っている。

平成5（1993）年、私はリーダー（係長）に昇任し、人事課の出先機関である職員研修所に配属される。ここでは尊敬する諸先輩方の努力にも関

ならず、未だに聴講型の研修が主流であった。当時、叫ばれていた政策形成研修を体系的・実践的に採り入れなければ、山梨県は「居眠り自治体」（松下圭一先生）で終わってしまうとの危機感から、時間外勤務の縮減を指揮する立場にある人事課の出先機関であるにも関わらず残業に残業を重ね、体系的・実践的政策形成研修の構築に取り組むことになる。新任職員研修には、ご無理をいって、法政大学の故松下圭一先生を毎年お招きし、「鉄は熱いうちに方式」の研修を採り入れた。その後の階層別研修には、本学科の江口清三郎先生、日高昭夫先生、さらに、北大路信郷先生（当時、静岡県立大学）など政治行政関係の錚々たるメンバーに「理論+実践型研修」をお願いした。こうして、山梨県と行政学科との間には、切っても切れない関係が創り出されることになる。

その後、行政学科の江口、日高両先生に加え、中井道夫先生、江藤俊昭先生には私が中心となって立ち上げた山梨県職員有志の研究会にご参加いただき、行政学や地方自治論、公共政策に関するご報告や実際の山梨県行政の課題に対するアドバイスなどを頂いた。職員研修所の2階の講義室を会場に月2回というハードのスケジュールにも関わらず、江口先生には全ての研究会にご参加いただいたと記憶している。ゲストスピーカーとして専修大学の白藤博行先生をお招きした時には、本学12号館2階の現ローカル・ガバナンス研究センター会議室をお貸しいただいた。この時の研究会には濱田一成先生にもご参加いただいたことを覚えている。この時には、後に山梨学院大学に職を得て、ご退職される濱田先生の研究室を引き継ぐことになることなど思いもしなかった。

この時期、法学部長をなさっていた椎名慎太郎先生が、公共政策研究科（当時）への県職員の派遣制度化の要請にいらしたり、生涯学習センター長として、先の研究会のメンバーをセンターにお招きいただき、講師でいらしていた丸山正次先生の「コモンズの悲劇」のお話に、「制度を作れば

解決しますよね」などと生意気な意見を述べたり、私自身も発表させていただいたことを鮮明に覚えている。その時の事務局長は永井健夫先生であった。

その後、私は広聴広報部門に異動し、移動知事室や知事への手紙、知事と市町村長との対話などの担当になるが、平成10（1998）年4月から制度化された職員派遣制度を活用して公共政策研究科で江口先生から地方自治の演習指導を受けることになる。ご指導をいただいた先生方は、ほかに地方行財政の濱田先生、地域政治論の江藤先生、公共政策論の前田成東先生（現東海大学）などほとんどが行政学科と兼任の先生方で、先の研究会とこの大学院での経験が後の教育者・研究者としての仕事に大きく役だったことはいうまでもない。前田先生には、この時の縁もあり、先生がご担当の「地方公務員論」に特別講師としてお招きいただき、独特の自治体職員論を披瀝したことがあったが、当時の受講生（60名程度だったと思う）には、私の意図はほとんど伝わらなかったのではないかと思う。

図らずも、私は平成15（2003）年4月に、本学をお辞めになる前田成東先生の後任として政治行政学科の専任教員の職を得ることになる。この前年に日高先生が学科長に就任していたことから、この打診は日高先生の研究室においてであった。先に記したように、学問分野こそ違おうが、公務の道に進むまで研究者を目指していた私にとっては大変有り難いお誘いであった。就職した直後に、日高先生から「私の研究室にちょっと来ないか。浜松市の職員を呼んでいるんだ。」というお誘いをいただき、研究室に行ってみたら、既に浜松市の政策課題研究研修の講師として私の名前が刷り込まれていた時には啞然としたが。しかし、結果的には私にとって大変勉強になり、13年間も続けることになった。

初年度は、前田先生が担当なさっていた「行政学」と「政策過程論」、それに2年生、3・4年生の「専門演習」、「新入生研修」（現在の「基礎

演習)などを担当したことを覚えている。中でも行政学科発足時からの科目である「政策過程論」については、公共政策の基礎理論を学んだ上で、山梨県の特定の課題の解決策を考えるという課題解決型授業を行ったことを覚えている。ただ、「地方公務員論」も「政策過程論」も形を変えて存続してはいるが、科目名として今は存在していないことはさみしい限りである。

その後は、政治行政学科の一兵卒として教育、研究、学内行政、社会貢献のために研鑽を積むことになるが、公務員であった時の「リズム」と大学教員のそれ、あるいは学科の方向性と私が考える学科のあり方とが必ずしも噛み合わず正直に申し上げて無力感を感じたこともあったように思う。

その後、学科長を拝命したわけだが、その時には学科の現実と私の理想とは相当程度ズレており、加えて、早くから学科廃止の方向性も確定していたため、当然のことではあるが、政治行政学科のバラ色の未来を描くことは叶わなくなっていた。地方私学において独特の道を歩んできた政治行政学科は、私がお手伝いした数多くの自治体の審議会における事前の打ち合わせや休憩時間などに自治体の幹部職員から相当の期待を持たれていたし、行政学や地方自治論、公共政策の基礎知識を身につけた学生が、公務の道に進んでくれることへの期待が次から次へと表明されたことは事実として記しておきたい。ある自治体の首長からは、わが自治体の主力派閥(?)は、本学政治行政学科出身で、彼ら・彼女らは仕事も手堅く発想も豊かであることから、今後もどんどん送り込んでくれるよう懇願されたこともあった。

政治行政学科の「要素」は、新しく再編される法学部の中に取り入れられることになった。このことは喜ばしい限りである。しかし、その学園体系をすみずみまで考慮しながら展開することは至難の技である。したがって、そうした「要素」が遺憾なく発揮されることには限界があるように思

う。私は、一兵卒であり、かつ、まもなくこの大学を去っていく身である。ここで自説を展開しても意味がないし、同僚にも聞き入れられないであろう。しかし、同僚諸氏には、この大学、そしてまたこの学部のあるべき姿について忌憚のない議論を正々堂々で行っていただきたい。そして、あるべき姿についてコンセンサスを形成していただきたい。その上で、そのあるべき姿に一步でも近づけるよう協力を惜しまないでいただきたい。これらのことを学部の同僚諸氏に切にお願いして筆を置くことにする。